

近代史

旧仙台藩士や旧会津藩士の 琴似入植に始まる全道開拓

北海道の開拓と防衛を担った屯田兵制度。その中心には、明治維新で職を失った士族たちの活躍があった。

開拓と国防を担った屯田兵制度

明治政府が近代国家としての体制を整えようとするなか、北海道は国土拡張と安全保障の最前線に位置づけられた。とくにロシア帝国の南下政策が現実の脅威として迫ると、政府が北海道の防衛と開発を国家の優先課題とし、これに対応する制度として打ち出したのが屯田兵制度である。

屯田兵制度は、開拓使の黒田清隆次官によって立案・導入された。これは、単なる移住や農業振興を超え、「国境を守る農民兵士」を育成する目的があった。おもな対象となったのは、北海道内では旧松前藩のほか、青森、宮城、酒田（現・山形県）の3県であった。



琴似に残る屯田兵の兵屋跡。1874(明治7)年に208戸建てられたうちの1戸を修理・復元した。

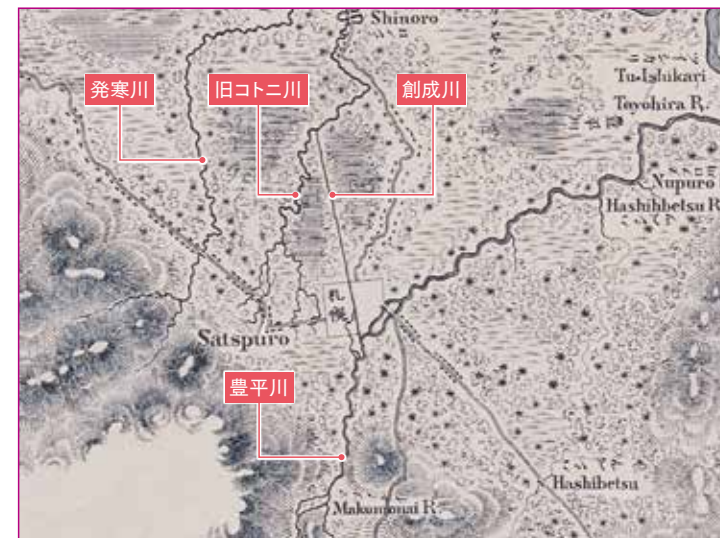
旧仙台藩や旧会津藩をはじめとする東北諸藩の士族たちは、戊辰戦争で敗れたあとに職と地位を失っており、彼らを救済しつつ、武士としての経験を生かして国防や開拓に従事させるという、極めて戦略的な政策であった。

制度の内容としては、屯田兵1戸ごとに土地と住宅が支給され、平時には農業に従事し、有事には軍隊として動員されるというしくみがとられた。家族をともなった入植が前提だったため、単なる駐屯地ではなく、「兵村」という形での集落形成が図られた点が特徴として挙げられる。兵村は整然とした街区で構成され、中央に練兵場、神社、学校、屯所などが配置されていた。農具や生活資材の供給体制、医療施設の設置、指導者による農業技術指導など、国が全面的に支援する体制が整っており、日本が国家として辺境をいかに統治・防衛するかという思想を体現するものであった。

拡大する屯田兵村の実態

1874(明治7)年、最初の屯田兵村が設置されたのは札幌市琴似である。西区琴似二条の「屯田兵村兵屋跡」には当時の住居が復元された木造建築があり、屯田兵の暮らしぶりに思いを馳せることができる。

▶北海道石狩川図(部分)



1875(明治8)年につくられた石狩川周辺の地形を示す地図。中央の四角く囲った札幌を上から下へ貫く直線が創成川、その左にある旧コトニ川と発寒川に挟まれたあたりが琴似地区。
所蔵:北海道大学附属図書館

1873(明治6)年に完成した開拓使札幌本庁舎。旧北海道庁本庁舎の南側にあった。



所蔵:北海道大学附属図書館

琴似への入植は、旧仙台藩士や旧会津藩士らが第一陣となった。琴似屯田兵村では、農業経験が乏しい士族たちが過酷な気候と不慣れな土地条件に苦しみながらも、地域の基盤形成に大きく貢献したのである。1875(明治8)年に198戸が入植し、その後追加や分家補充があって、208戸となった。次いで1876(明治9)年、発寒に32戸が入植し、琴似屯田兵村の分村となり、合計240戸をもって第一大隊第一中隊が編成された。

屯田兵村の生活は決して安定したものではなかった。農業経験の乏しさ、冷害や病気、物流の不備、生活物資の不足など、北海道の自然環境での暮らしは厳しいものだった。

しかし、士族の入植者たちは統制された組織のもと、農地開墾を進め、この地に根を張っていった。やがて屯田兵は平民からも募集するようになり、1890(明治23)年頃からは平民が主体となっていく。

屯田兵制度は、明治政府による国家建設の象徴的制度として発展し、1890年(明治23年)には制度的な拡充期を迎える。その後も次々と新たな兵村が設置され、全道で37カ所にのぼる屯田兵村が成立。1906(明治39)年に正式に制度が廃止されるが、屯田兵が築いた農地、学校、道路、水路は、今日の北海道の地域基盤そのものである。

近代史

琴似・山鼻・新琴似・篠路と 札幌に誕生した4つの屯田兵村

北海道開拓と北辺防衛という国家的課題に取り組むために導入された屯田兵制度。札幌周辺ではどのように入植が進められたかを見ていこう。

耕作と国防のふたつの役割

1874（明治7）年に創設された屯田兵制度は、兵士が家族とともに移住し、与えられた土地を耕作するいっぽう、軍事訓練を受けて国防にも備えるという「半農半兵」の形態であった。この制度の実施に尽力し「屯田兵の父」と称されたのが永山武四郎である。薩摩出身の永山は、開拓使在勤時に同僚幹部3人とともに屯田兵制度設立の建白書を提案。この提案が受け入れられて、屯田憲兵例則が制定された。

屯田兵制度では、北海道という未開の地に定着させるため、政府は移住者に対して無償で土地と住宅を与え、3年間の生活資金を給付した。兵屋はすべて同じ仕様で建てられ、



1874(明治7)年の琴似屯田兵屋。全部で208戸建てられた。
所蔵:北海道大学付属図書館

村全体が規律ある軍事的構造をもっていた点
が特徴である。また、兵村は国内外のさまざまな作物を育てる試験農場の役目も兼ねており、養蚕やリンゴ、豆、ジャガイモなど、現在の北海道の作物の多くはこの時期に試作が開始されたものだ。札幌市内にもいくつかの屯田兵村が設けられ、なかでも琴似、山鼻、新琴似、篠路の4村は、初期から重要な役割を担った。

市域で重要な役割を果たす

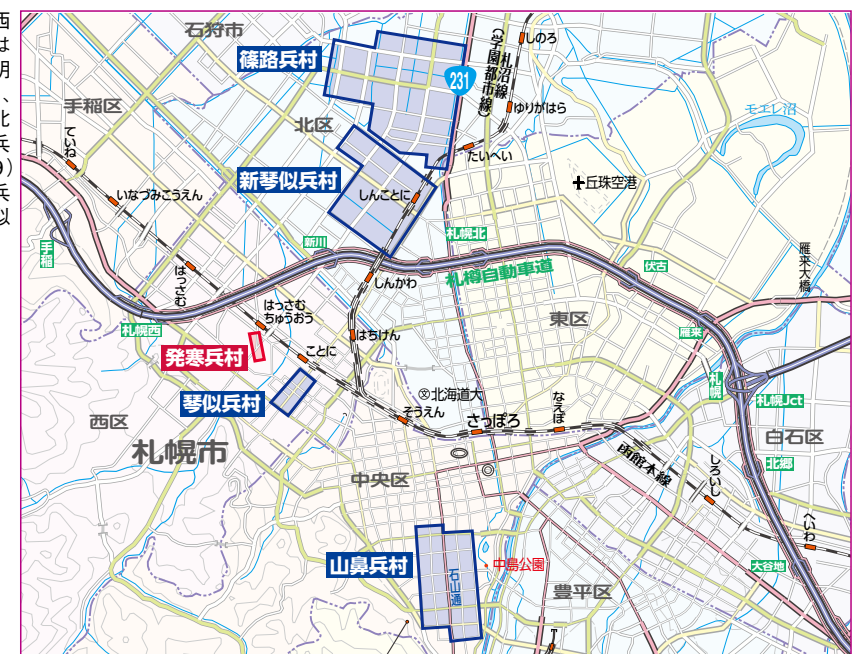
1874（明治7）年に最初に設置されたのが琴似屯田兵村で、札幌の防衛線の西端を担った。おもに仙台藩や会津藩の士族が入植し、教育や医療制度も早くから整えられ、その後のモデルケースとなった。多くの人材を育ててほかの兵村に送り出し、各地の兵村で指導的な役割を果たすことになる。

山鼻は札幌本府の治安維持のため、開拓とともに兵備・警衛を担う屯田兵村だった。中隊本部には馬場が設けられ、ここでは農業畜産にも力を注ぎ、馬匹改良も行われた。

1887（明治20）年に入植した新琴似には九州や中国地方の士族が多く、先行する屯田兵村と異なる文化が流入し、地域文化の

▶札幌周辺の屯田兵村

1875(明治8)年に琴似兵村(西区)への入植が始まり、翌年には山鼻兵村(中央区)、1887(明治20)年から新琴似兵村(北区)、1889(明治22)に篠路兵村(北区)の入植が始まった。琴似兵村の分村として1876(明治9)年より開拓が進められた発寒兵村は、1882(明治15)年に琴似兵村と合併した。



多様性が生まれた。農業開拓の進展も著しく、大麻、大麦、のちには秋大根の産地としても知られるようになる。

篠路には1889（明治22）年に入植するが、ここは一大湿地帯であり、融雪期には石狩川の氾濫による水害に苦しめられた。そこで兵村公有財産を水田の灌漑に充当し、排水工事や用水路の整備によって農地化が進められていったのである。

屯田兵が実際に出征した例としては、1877（明治10）年の「西南の役」が挙げられる。永山武四郎は准陸軍少佐として琴似、山鼻の屯田兵で第一大隊を編成して熊本（百貫石港）から上陸し、郷土の先輩にして英雄である西郷隆盛と戦った。この戦役での活躍が高く評価され、屯田兵は日露戦争でも最前線で活躍することになる。

のちに永山は北海道庁長官としても北海道開発に生涯を捧げ、とくに彼が尽力した上川地域は明治天皇が永山の名をとって永山村と名づけた。

北区に連なる屯田防風林は 屯田兵村の境界線？

北区に点在する「屯田防風林」は、かつての屯田兵村の境界線に沿って整備されたものである。基盤目状に整然と並ぶこの林帯は、寒風や吹雪から農地と住居を守る実用性だけでなく、集落の構造を軍事的に秩序立てるための機能も果たしていた。その始まりは大正時代にまでさかのぼる。農作物を守るために植樹された防風林は、現在ではヤチダモをはじめ、ハルニレ、ナナカマド、シラカバなど多様な樹種で構成され、豊かな樹林帯を形成している。



厳しい季節風から農作物を守るために植えられた防風林。